

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣研究報告書

____年 ____月 ____日

派遣者氏名（専門分野）	高橋 綾 （ 倫理学・臨床哲学 ）
-------------	-------------------

下記のとおり報告します。
記

研究テーマ	ハワイ州の初等中等教育における哲学対話教育の有効性に関する調査研究
-------	-----------------------------------

派遣期間

2012 年 2 月 3 日 ～ 2012 年 4 月 3 日

訪問 機関	国	都市	訪問機関	受入研究者
	アメリカ 合衆国	ハワイ州 ホノルル	ハワイ大学	トーマス・ジャクソン教授

派遣先で実施した研究内容

ハワイ大学のトーマス・ジャクソン教授が中心となって進めているハワイ州の初等中等教育における対話型哲学教育（通称「こどものための哲学 philosophy for children : 通称 p4c」）について、実際に小中学校、高校の授業に継続的に参加して調査を行うほか、ジャクソン教授、ベン・ルケイ研究員ら p4cHawaii council の面々と意見交換を行い、その意義についての考察を深めた。

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

ハワイ p4c の特徴としては、対話実践の中での community づくりに重点を置いているという点が挙げられる。「こどものための哲学」の創始者であるモンクレア大学のマシュー・リップマン教授も、哲学対話にとって community of inquiry（探究の共同体、共同での探究）が重要であると述べているが、ハワイ p4c やジャクソン教授の実践は、様々な民族的、文化経済的背景を持つ子どもが集まるハワイの教室において、誰でも安心して話し合いに参加でき、思ったことを表明できるという intellectual safety に基づいた community を作ってきたという点が特筆に値する。また、この community は教室の中、生徒たちの間にとどまらず、小学校や高校の教員同士の間、学校を中心とした地域の community づくりへと展開されていることも今回の調査で明らかになった。

今回の調査では、調査者本人もこの対話と学習の community の一部となり、自ら探究に参加することを通じてその意義を発見しなおすことができた、他の参加者からも「このクラスのみんなと会えなくて寂しかった」「このクラスでは自分が本当に自分らしくいられる」というような発言を多く聞くことができ、学習者の視点で対話という共同探究における community や intellectual safety の重要性を確認できた。

また、ハワイ大学では、ワイキキ小学校やカイルア高校などと提携し、全学年のカリキュラムに哲学対話を取り入れた実践を行っている。大学の教員、哲学者が小中高の授業に参加し、対話のファシリテーションを行う他、哲学研究者が学校に常駐し、教員やカリキュラムについてのサポートを行う「レジデンス型研究 (Philosopher In Residence : PIR)」という新しい研究実践の形態を模索しつつある。今回の滞在では、二ヶ月間にわたり、レジデンス型研究を行うジャクソン教授やルケイ研究員を取材し、大学研究機関と小中高校の新しい連携のあり方を調査することができた。この PIR、レジデンス型研究は、研究者が外的、客観的な視点から実践を評価したり、専門的知識を供与するという仕方とは異なり、研究者みずから実践コミュニティの一部となり、コミュニティの成員と協力しながら新たな実践を作り出して行くという、これまでにない新たな研究実践のモデルを提示するものであり、人文学の新しい研究実践のあり方を示すものであると考えられる。

また、今回の調査滞在の大きな課題であった、対話のなかの思考をどのように評価するか、という問題に関してもいくつかの重要な示唆が得られた。ハワイ大学および p4c ハワイの実践では、哲学対話と協働探究については、従来型の外在的な評価（個人の成績を数値化する）とは異なる 内在的な評価が必要との認識のもと、先進的な研究教育実践がなされている。その特徴として、学習やプログラムの評価そのものに学習者が参加し、そのことがさらに彼らの協働学習を深化させる形式が模索されている。ハワイの p4c のクラスでは、最後に生徒による今日のクラスおよび自分の言動の評価を全員で行うこともその一つの特徴である。今回の滞在では、ジャクソン教授らと「評価」についての議論を重ねた結果、カイルア高校の教員であり、現在カイルア高校やワイキキ小学校で PIR を務めるチャド・ミラー氏、アンバー・マカラウ氏の行ったヴィデオ映像を用いたプロジェクトは、これまでの学習の「評価」という文脈とは全く異なる「評価」のあり方の可能性を示すものとなるのではないかという結論を得た。このプロジェクトは、哲学対話の授業を生徒たちに撮影編集させ、それを見て、「よい教師／教育とはどんなものか？」という問いに答えさせるというものである。このプログラムの特徴は同じ議論を生徒だけでなく、同校の他の教員や父兄、地域の人々とも行ったという点にある。この実践は、「評価」を学校や教室内部の個人のランクづけとして用いるのではなく、「評価」自体を community の探究の対象とし、community の拡張と深化のツールとして用いるという意味で「拡張による学習」(エンゲストローム) の実践例として革新的な試みと言える。

派遣後の研究発表の予定

- ・2013 年春 刊行予定の書籍「こどもの哲学」(大阪大学出版会)において、ハワイ大学の実践について文章を執筆予定。

派遣者連絡先

電話番号	090 (8388) 7162
E-mail アドレス	aya.tricot@gmail.com